

# 『万葉集』における「念」「思」の用字法

柚 木 靖 史

## はじめに

『万葉集』<sup>(1)</sup>の中で、「オモフ」という和語動詞を表記するために使われた代表的な漢字として、「念」と「思」を挙げることができる。<sup>(2)</sup>ここで代表的な漢字としたのは、「念」と「思」の使用数を調べてみると、「念」が464例、「思」が210例と、両者かなり多い使用数を見ることができからである。「念」「思」の他にも、『万葉集』中で、「オモフ」という和語動詞を表記したと考えられる漢字としては、「想」「憶」があるが、これらはそれぞれ2例、1例と、使用数が少ない。

さて、「念」「思」が「オモフ」と読まれたであろうことは、『万葉集』の古写本<sup>(3)</sup>の「念」「思」に付された仮名や、万葉仮名で表記された類歌との照合、古辞書に掲載された「念」「思」<sup>(4)</sup>の訓から考えて、ほぼ間違いなからう。ただし、

「思」の漢字のごく一部に「シノフ」と読まれたと考えられるものもあるので、以下の考察ではこの例を除いて考える。

本稿では、『万葉集』における「念」「思」をとりあげ、その使い分けがあったかどうか、あったとすればそれぞれどのような意味で使われていたのかということについて考察する。「オモフ」を表記したと考えられる他の漢字も併せて考察する必要もあるが、まずは、用例数が多く、使い分けが見極めにくい「念」「思」を考察の対象にすることにした。

拙稿の筆者は、和化漢文の「念」「思」の用字法について調べたことがある。<sup>(5)</sup>その折には、上代成立の文献として『古事記』『日本書記』を取り上げたが、紙面の都合で『万葉集』は取り上げられなかった。今回は、その足りなかった部分を補うためのものである。ここで、その論文のなか

から、上代成立の『古事記』や『日本書紀』の「念」「思」の用字法についてまとめておく。

上代成立の『古事記』『日本書紀』の「念」は、継続性や強さをともなった思いを表す漢字として使用されていた。これは、たとえば『説文解字』に「念 常思也」とみられるような、中国における「念」の意味に沿ったものであると思われる。一方、「思」は、「記憶する」「思い出す」「考える」等、広範囲な思考活動を表す漢字として使用されていた。従って、本邦の上代において「念」と「思」は、意味上区別して、使い分けられてきたものと考えられる。

これに、同じく上代に成立した『万葉集』を考察に加えると、どのようなことになるのであろうか。『万葉集』でも、「念」「思」は意味上、使い分けられているのか、『万葉集』の「念」にも「継続性や強さ」といった意味が認められるのであろうか。このようなことを本稿では考えていきたい。『万葉集』を対象に、「念」「思」について考察されたものには、鶴久氏の「万葉集における正訓文字の訓法——念・思について——」という論文がある。<sup>(6)</sup>ただし、この論文での中心課題は、万葉集において、「念」「思」字を「オモフ」と読むか、「モフ」と読むかということであり、その意味上

の使い分けについては触れられているところがないので、ここでは用字法という別の視点から、『万葉集』の「念」「思」について考えていくことにする。

一、『万葉集』における「念」「思」の使用数  
『万葉集』に、「念」は464例、「思」は210例認められ、「念」は「思」に比べて、約二倍の使用数である。『万葉集』は、題詞・左注のような散文と、和歌の韻文とから構成されている。「念」は、散文に1例、残りの415例が韻文で使用されたものである。ただし、「念」の1例は、手紙の中で使用されたものである。一方、「思」は、散文に20例、韻文に127例存する。このように、「念」は、韻文における「オモフ」の表記のために概ね使用されている。一方、「思」は、韻文にも使用されているが、散文に多くの使用数があることが「念」との違いである。散文における「オモフ」の表記としては「思」が選ばれ、韻文における「オモフ」の表記としては、「念」も「思」も選ばれたが、このうち「念」は韻文（和歌）専用であったといえる。

さて、ここで、散文に使用された「念」の例を示しておく。

1 常に芳徳をおもふこと「常念<sup>レ</sup>芳徳」、いづれの日にかよ

くやまむ。(巻第十八 4072 手紙)

右の例は、大伴宿禰池主から大伴家持へ宛てた手紙にみえる「念」の例である。「絶えず家持様の御徳を思うことは」といった内容が書かれている。ここで、「常に」とあることに注目したい。このような時間の継続を示す表現は、『古事記』にも認められたもので、ここでの「念」の使い方は、『古事記』のような上代成立の和化漢文の使い方と矛盾していない。

次に、散文の「思」について、みてみよう。

2 磐姫皇后、天皇をおもひて作らす歌四首「磐姫皇后、

思天皇御作歌四首」(巻第二 85 題詞)

3 弓削皇子、紀皇女をおもふ御歌四首「弓削皇子、思紀

皇女御歌四首」(巻第二 119 題詞)

4 出雲守門部王、都をおもふ歌一首「出雲守門部王思京

歌一首」(巻第三 371 題詞)

5 ほととぎすをおもふ歌一首「思霍公鳥歌一首」(巻第十

七 3914 題詞)

6 陶然に日をおくり、何をかはらむ何をかおもはむ「何

慮何思」。(巻第十八 4132 手紙)

7 これによりて二十三日のゆふへに、たちまちにほととぎすのあかときになかむ声をおもひて作る歌二首「忽

思霍公鳥暁喧作歌二首」(巻第十九 4171 題詞)

8 帛公略説に曰く、「伏しておもひみづからはげむに「伏思自励」、この長生をもちてす。」(巻第五 897 題詞)

2 は「磐姫皇后が天皇(仁徳天皇)を思う」という内容で、3 は「弓削の皇子が、紀皇女を思う」という内容である。いずれも、「異性を恋しく思う」という意味である。4 は、「出雲守門部王が都を思う」という内容である。5 は、「詠者がほととぎすを思う」という内容である。6 は、手紙のなかで「思」が使われた例で、意味は「思い悩む」である。7 は、「詠者がほととぎすの声を立夏前日に想像する」という内容であり、ここでの「思」は「想像する」といった意味であろう。8 は、『帛公略説』という漢文の引用文のなかで使用された例である。「伏しても、長生について思う」という内容である。

散文の「思」は、「(心引かれる対象に対して)恋しく思う」「思い悩む」「想像する」といった意味が認められ、様々な思考活動の意味で使用されている。

さて、ここで注目したいのは、3、4、5の題詞のついた和歌には、いずれも「オモフ」が使われているのであるが、その漢字が全て、題詞とは異なった「念」が使われていることである。

9 大船のはつる泊まりの たゆたひに 物おもひやせぬ「物念瘦奴」 人の児ゆゑに（巻第二） 122 3の題詞に対応する和歌

10 おうの海の 河原の千鳥 汝が鳴けば 我が佐保川の おもほゆらくに「所念国」（巻第三） 371 4の題詞に対応する和歌

11 ほととぎす 今し来鳴かは 万代に 語り継ぐべく おもほゆるかも「所念可母」（巻第十七） 3914 5の題詞に対応する和歌

このように、題詞と和歌で「オモフ」の表記が異なる例がいくつも見いだせることから、題詞は「思」で表記し、和歌は「念」で表記するという意識が編者に存するように思われる。ただし、和歌の中には、「念」も「思」も使われているので、この使い分け意識だけでは、『万葉集』における「念」「思」の意味用法を説明し尽くしたことはならない。以下、『万葉集』における和歌の「念」「思」について、いくつかの観点から考察する。

## 二、『万葉集』における「念」「思」の使い分けの有無

和歌の「念」「思」には、厳密な使い分けがなされていない

いのではないかと疑われるような例が、いくつもある。ここでは、まず、これら使い分けについての判断の難しい例からみていくことにする。

### ①使用状況の観点から

まず、一首の和歌の中に、「念」も「思」も使用された例を挙げる。

12 玉藻なす なびき寝し児を 深海松の 深めておもへど「深目手思騰」 さ寝し夜は いくだもあらず 延ふつつ「念乍」 かへりみすれど 大舟の 渡の山の 黄葉の 散りのまがひに 妹が袖 さやにもみえず 妻ごもる 屋上の山の 雲間より 渡らふ月の 惜しけども 隠らひ来れば 天伝ふ 入日さしぬれ ますらを と おもへる我も「念有吾毛」 しきたへの 衣の袖は 通りにて濡れぬ（巻第二） 135 和歌

13 うつせみと おもひしときに「念之時尔」（一に云ふ「うつそみと思ひし」宇都曾臣等「念之」） 取りもちて我が二人見し 走り出の 堤に立てる 槻の木の こちごちの枝の 春の葉の しげきがごとく おもへりし「念有之」 妹にはあれど 頼めりし 児らにはあれ

ど 世の中を 背きしえねば かぎりひの もゆる荒  
野に 白たへの 天領巾隠り 鳥じもの 朝立ちいま  
して 入り日なす 隠りにしかば 我妹子が 形見に  
置ける みどり子の 乞ひ泣くことに 取り与ふる  
ものしなれば 男じもの わきばさみ持ち 我妹子  
と 二人我が寝し 枕づく つま屋のうちに 昼はも  
うらさび暮らし 夜はも 息づき明かし 嘆けども  
せむすべ知らに 恋ふれども 逢ふよしをなみ 大鳥  
の 羽易の山に 我が恋ふる 妹はいますと 人の言  
へば 岩根さくみて なづみ来し 良けくもそなき  
うつせみと おもひし妹が「念之妹之」玉かざる ほ  
のかにだにも 見えなくおもへば「不見思者」(巻第二

210 和歌

14 おうの海の 潮干の潟の 片もひに「片念」 おもひや  
いかむ「思哉将去」 道の長手を(巻第四 536 和歌)  
15 おもはぬを「不念乎」 おもふといはば「思常云者」  
おほのなる 三笠のもりの 神ししらすむ(巻第四

561 和歌

16 泊瀬川 流る水沫の 絶えばこそ 我がおもふ心「吾  
念心」 遂げじとおもはめ「不遂登思菌目」(巻第七

1382 和歌

17 あめつちのはじめの時ゆ 天の川 い向かひをりて  
ひととせに ふたたびあはぬ つまごひに 物おもふ  
人「物念人」 天の川 やすのかはらの ありがよふ  
いでに渡りに そほぶねの ともにへにも ふなよ  
そひ まかぢしじぬき はたすすき もとはもそよに  
秋風の 吹きくるよひに 天の川 白波しのぎ 落ち  
たぎつ 早瀬渡りて 若草の 妻が手まくと 大舟の  
おもひ頼みて「思憑而」 こぎくらむ そのつまの子が  
あらたまの 年のを長く おもひこし「思来之」 恋つ  
くすらむ ふみづきの なぬかのよひは われも悲し  
も(巻第一〇 2089 和歌)

18 うらめしと おもひてせなは「思狭名盤」 ありしかば

よそのみそ見し 心は思へど「心者雖念」(巻第十一

2522 和歌

19 おもはぬに「不念丹」 至らばいもが うれしみと ゑ  
まむまよびき おもほゆるかも「所思鴨」(巻第十一  
2546 和歌)

20 うるはしと おもへりけらし「思篇来師」 な忘れと

結びしひもの とくらくおもへば「解楽念者」(巻第十

一 2558 和歌

12では、「深目手思騰」とある一方で、「念有吾毛」とあ

る。「思」の意味は、「妻のことを深く思う」という意味だが、「念」の意味は、「自分のことを益荒男だと思ふ」という意味で、「念」と「思」では、主語や対象が異なっている。

13では、「念之時尔」「念有之」「念之妹之」とある一方で、「不見思者」とある。「念之時尔」「念有之」の「念」は「妻を恋しく思う」という意味で、「念之妹之」は、「妻をまだ生きているこの世の人だと思ふ」という意味である。「不見思者」は、「妻の姿が見えないことから判断して考える」という意味で、「念」と「思」の意味は異なっている。

14では、「片念」とある一方で、「思哉將去」とある。「念」「思」ともに、「娶った乙女を恋しく思う」という同じ意味で使われている。ただし、「念」は名詞、「思」は動詞として使われていて、文法上の差異が存する。

15では「不念乎」とある一方で、「思常云者」とある。どちらも「恋しいと思ふ」という意味で、相手も同じである。この例を見ると、「念」「思」の使い分けがなかったかのようである。ただし、「念」は「心の中で実質的に恋慕うこと」であるのに対して、「思」は「恋慕ってもいないのに表面的に取り繕ってそれらしく見せること」ということなので、「念」「思」の使い分けがあったとすれば、この辺りの微妙な意味の違いに「念」「思」使い分けの判断材料が存し

たかも知れない。もともと、板避法のように、敢えて同じ字を繰り返さなかったということも考えられるが、同じ和歌の中で、「念」なら「念」といったように、同じ字を使っている例も存するので、この例だけに技法的要素は認めにくい。

16では「吾念心」とある一方で、「不遂登思齒目」とある。ここでの主語は「念」「思」ともに同じであるが、意味は、「念」が「相手を恋しいと思ふ」であるのに対して、「思」は「(遂げまいと)判断する」である。

17では「物念人」とある一方で、「思憑而」「思来之」とある。これらは、「念」が名詞、「思」が動詞といったように、品詞に違いがある。意味は、「念」が「相手を恋しく思う」の意味で、「思」は「思憑」の方が「あてに思う」、「思来」の方が「相手を恋しく思う」という意味である。

18では「思狭名盤」とある一方で、「心者雖念」とある。この場合、「思」「念」両者、主語が異なっていて、「思」は「相手が自分のことを恨めしいと思っている」といったように、相手が主語であるのに対して、「念」は「相手を恋しいと思ふ」といったように詠者自身が主語である。

19では「不念丹」とある一方で、「所思鴨」とある。ここでの「念」は、「(自分の訪れを)予測する」という意味で、

「思」は「(恋人の喜ぶ姿を) 想像する」という意味である。両者、意味が異なっている。

20では「思篇来師」とある一方で、「解念者」とある。ここでの「思」は、「(相手が自分のことを) 恋しいと思っている」という意味で、「念」は「(眼前の様子から) 判断する」という意味である。

以上、一首の和歌の中で、「オモフ」という和語を表記する際に「念」「思」が両方とも使用されている例をとりあげ、「念」「思」の意味を中心にみてきた。これらを見ると、「念」「思」の意味関係は微妙であるといえる。例えば、「相手を恋しく思う」という意味は、「念」でよく表される傾向にあるものの、その一方で、「思」にも同じ意味が認められるといった具合である。これらの例だけでは、「念」「思」を意味によって使い分けていたと断言することはできないので、後に、全用例を対象に、「念」「思」の意味について詳しく見ていくことにする。また、品詞との関わりも考えられるので、このことについても、後でさらに詳しく見ていくことにする。

さて、先に、一首の和歌の中で「念」「思」が両方使われている例をみてきたが、異本間で異なる字を使っている例も存する。以下、その例を示す。

21 風早の 美保の浦廻の 白つつじ 見れどもさぶし

なき人おもへば「無人念者」或云 見れば悲しも 無き人をおもふに「無人思丹」(巻第三 434 和歌)

この例などをみると、「念」「思」の間に、文法上や意味上の差異などは考えにくいようである。たとえば、意味上の差異があるにしても、使い方の基準のなかに、両者どちらの字も使い得るような部分が存したものと考えられそうである。あるいは、「念」「思」の使い方の規範意識は厳密ではなく、緩やかであったということも考えられよう。加えて、異本間で漢字が異なるということは、時代差、個人差といったことも考えなければならない。いずれにしても、この例は、「念」「思」の使い方が、様々な難しい問題を含んでいる可能性を示すものである。

また、「念」「思」の使い方、共通するところが存することを示すもう一つの例として、長歌とその反歌で、異なる漢字を使っているということが挙げられる。

22 白たへの 袖さしかへて なびき寝し 我が黒髪の  
ま白髪に 成りなむ極み 新代に とともにあらむと  
玉の緒の 絶えじい妹と 結びてし ことは果たさず  
おもへりし 心は遂げず 白たへの 手本を別れに  
きびにし 家ゆも出でて みどり子の 泣くをも置き

て朝霧の おほになりつつ 山背の 相楽山の 山  
のまに 行き過ぎぬれば いはむすべ せむすべ知ら  
に 我妹子と さ寝しつま屋に 朝には 出で立ち俣  
ひ 夕には 入り居嘆かひ わき挟む 子の泣くごと  
に 男じもの 負ひみ抱きみ 朝鳥の 音のみ泣きつ  
つ 恋ふれども 験をなみと 言とはぬ ものにはあ  
れど 我妹子が 入りにし山を よすかとぞおもふ

〔因鹿跡叙念〕（巻第三 481 和歌）

23 うつせみの 世のことなれば よそに見し 山をや今  
は よすかとおもはむ 〔因香跡思波牟〕（巻第三 482

和歌 481の反歌）

これらの481と482の歌は、長歌とその反歌の關係にあり、  
両者に使われている「念」「思」は、同じ意味内容を示すも  
のと考えてよい。従つて、この例は、「念」「思」の使い方  
には、明確な基準がなかったのではないかということをし、  
示唆している。

さらに、同じ表現であるにもかかわらず、「念」も「思」  
も使われている例がある。

○オモフドチ

24 おもふどち 〔念度知〕 ますらをのこの このくれしげ  
き思ひを 見あきらめ 心やらむと（後略）（巻第十九

4187 和歌）

25 あたらしき 年のはじめに おもふどち 〔思共〕 い群  
れてをれば うれしくもあるか（巻第十九 4284 和歌）  
○オモフソラ

26 ほととぎす 来鳴くさつきに 咲きにほふ はなたち  
ばなの かぐはしき 親のみこと あさよひに 聞か  
ぬ日まねく あまざる ひなにしをれば あしひき  
の 山のたをりに 立つ雲を よそのみ見つつ 嘆く  
そら 安けなくに おもふそら 〔念蘇良〕 苦しきもの  
を なごのあまの かづき取るといふ 白玉の 見が  
ほしみおもわ ただ向かひ 見む時までは まつかへ  
の さかえいまさね たふとあが君（巻第十九 4169  
和歌）

27 こもりくの はつせの川のかみつ瀬に うをやつかづ  
け しもつ瀬に 鵜を八つ潜け 上つ瀬の あゆを食  
はしめ 下つ瀬の 鮎を食はしめ くはしいものに あ  
ゆををしみ くはし妹に 鮎を惜しみ 投ぐるさの  
とほざかりゐて おもふそら 〔思空〕 安けなくに き  
ぬこそば それやれぬれば つぎつつも またも合ふ  
といへ 玉こそば をの絶えぬれば くくりつつ ま  
たも合ふといへ またもあはぬものは 妻にしありけ



24、25は、「オモフドチ」(「気の合った仲間」の意)といふ同じ表現で、一方では「念」、他方では「思」のように、表記が異なる例であり、26、27は、「オモフソラ」(「不安な気持ち」の意)という同じ表現で、「念」「思」と表記が異なる例である。これも、先の異本間で表記が異なったり、あるいは長歌と反歌で表記が異なったりといったことと同じように、「念」「思」の使い分けの基準について、疑問に思わざるを得ない例となる。

しかしながら、このような例があるからといって、即座に「念」「思」の使い分けが全く無かったということは早計に過ぎよう。用例数からみても、先に述べたように、和歌と題詞とでは「念」「思」の数が異なっており、和歌では「念」の方が「思」よりも際だって多く使用されているという事実もある。この結果は、何に依拠しているのであろうか。これを考えるために、さらに別の観点から、「念」「思」の意味用法について考えてみたい。

## ② 複合動詞の観点から

ここでは、文法的な観点から、「念」「思」の使い分けについてみておくことにする。まず、単独で動詞で使われた

ものの、複合動詞として使われたもの、名詞として使われたものに分けて使用数を示すと次のようになる。

名詞	複合動詞	単独の動詞	
24	40	400	念
10	48	152	思

それぞれの内訳を具体的に示すと次のようになる(片仮名で上段に示したものが「念」の例、平仮名で下段に示したものが「思」の例である)。

### 「単独の動詞」

#### 単独形

オモフ

226例 おもふ

#### ク語法

オモハク

2例 おもはく

オモフの自発形

オモホユ

81例 おもほゆ

オモフの尊敬語

オモホス

6例 おもほす

オモホシキ

0例 おもほしき

オモホシメス

5例 おもほしめす

102例

0例

13例

2例

1例

0例

助動詞が後接するもの

オモヘル（連体）	20 例	おもへる	3 例
オモヘレバ（已然）	0 例	おもへれば	1 例
オモヘリシ	1 例	おもへりし	3 例
オモヘリケリ	3 例	おもへりけり	0 例
オモヘルラム	1 例	おもへるらむ	0 例
オモヘリケラシ	0 例	おもへりけらし	1 例
オモヒシ	10 例	おもひし	4 例
オモフラム	4 例	おもふらむ	0 例
オモヒニシ	3 例	おもひにし	0 例
アヒオモフラム（接頭語）	1 例	あひおもふらむ	0 例
オモヒケメカモ	1 例	おもひけかも	0 例
オモヒツル	1 例	おもひつる	0 例
オモヒタリケレ	1 例	おもひたりけれ	0 例
オモヒタル	0 例	おもひたる	1 例
オモフラシ	0 例	おもふらし	1 例
オモヒケラシモ	0 例	おもひけらしも	1 例
オモハシム	0 例	おもはしむ	1 例
助動詞が後接するもの			
オモヒツツ	9 例	おもひつつ	7 例
オモヘカモ	2 例	おもへかも	0 例

接頭語のついたもの

モノオモフ	18 例	ものおもふ	1 例
アヒオモフ	6 例	あひおもふ	4 例
名詞のついたもの			
ココロオモフ	1 例	こころおもふ	0 例
〔複合動詞〕			
オモフが上にくるもの			
オモヒイヅ	5 例	おもひいづ	4 例
オモヒミダル	5 例	おもひみだる	7 例
オモヒシナフ	2 例	おもひしなふ	1 例
オモヒスグ	2 例	おもひすぐ	2 例
オモヒタノム	2 例	おもひたのむ	9 例
オモヒマス	2 例	おもひます	2 例
オモヒクラス	2 例	おもひくらす	0 例
オモヒワタル	2 例	おもひわたる	1 例
オモヒイマス	1 例	おもひいます	0 例
オモヒヤム	1 例	おもひやむ	0 例
オモヒヤスム	1 例	おもひやすむ	0 例
オモヒラル	1 例	おもひる	0 例
オモヒコフ	1 例	おもひこふ	1 例
オモヒタワム	1 例	おもひたわむ	0 例

オモヒアヘナシ	1 例	おもひあへなし	0 例
オモヒツミコシ	1 例	おもひつみこし	0 例
オモヒソム	1 例	おもひそむ	0 例
オモヒヤル	1 例	おもひやる	3 例
オモヒタラハス	1 例	おもひたらはす	1 例
オモヒハブラス	1 例	おもひはぶらす	0 例
オモヒナゲカヒ	1 例	おもひなげかひ	0 例
オモヒノブ	1 例	おもひのぶ	1 例
オモヒワヅラフ	0 例	おもひわづらふ	1 例
オモヒワスル	0 例	おもひわする	1 例
オモヒアマル	0 例	おもひあまる	1 例
オモヒマドフ	0 例	おもひまどふ	2 例
オモヒコシ	0 例	おもひこし	1 例
オモヒタケブ	0 例	おもひたけぶ	1 例
オモヒソム	0 例	おもひそむ	1 例
オモヒクユ	0 例	おもひくゆ	1 例
オモヒミル	0 例	おもひみる	1 例
オモヒモトホル	0 例	おもひもとほる	1 例
オモヒツク	0 例	おもひつく	1 例
オモフが下にくるもの			
コヒオモフ	1 例	こひおもふ	0 例

〔名詞〕

ナツカシミオモフ	1 例	なつかしみおもふ	0 例
オモヒ	14 例	おもひ	9 例
カタモヒ	5 例	かたもひ	0 例
モノオモヒ	4 例	ものおもひ	0 例
シタモヒ	1 例	したもひ	1 例

以上の分類から、分かることをまとめると次のようになる。

- (1) 助動詞が後接する場合は、両者に顕著な特徴は見いだせないようである。概して「思」の用例が少ないようであるが、これは全体の使用数の差によるものかと思われる。その他、若干、「念」のみに使用される助動詞、「思」のみに使用される助動詞が存するが、これは内容によって生じた偶然の結果であろうと思われる。ただ、オモフの自発形「オモホユ」の使用数について、「念」が「思」に比べてかなり多くなっていることは注目してよいかもしれない。
- (2) 複合動詞についても、「念」「思」のどちらを使うかという点で、顕著な傾向は認めたいが、全体の使用数は「念」のほうがかなり多いにも関わらず、「思」が使われる複合動詞の種類の多いことは注目さ

れる。

右の結果から、「念」と「思」の違いを見いだすことは難しいが、今考えているところを述べる。

まず、(1)の結果から、「念」に自発形が多いという傾向を認めてよいとすれば、「念」は自然とわき起こってくる思を表すことが多いということになる。この自然とわき起こってくる思とは、異性に対する恋情や、家族、上官、故郷に対する思慕の思いを代表として挙げることができよう。これに対して、意図的な思ひとは、ものごとに対する提案や考察、感想などの思考活動を代表として挙げることができよう。いずれにしても、これは意味の問題なので次項で取り上げていくことにする。

次に、(2)の結果から、複合動詞の表記に「思」を多く使う傾向があるということになるが、これをどう解すればよいであろうか。理由は様々考えられるが、私は、中国における「思」の用法自体、「念」よりも複合動詞を多く作る特徴が見られるので、本邦でもその特徴をある程度受け継いでいるのではないかと考える。『大漢和辞典』の「思」「念」の項目に掲載された熟語を見てみても、複合動詞として読み得るもののみを挙げると、「思」には「思感」「思危」「思詠」「思惟」「思慮」「思懼」「思願」「思索」「思察」「思

述」「思尋」「思念」「思望」「思媚」「思辨」「思慕」「思欲」「思量」「思慮」「思論」といった熟語が見いだせるのに対して、「念」には「念及」「念敬」「念思」「念誦」といったものしか見いだせない。中国において、「念」に複合動詞が少ないのは、「念誦」「念言」のように仏教語の意味が強いこととや、「強く思う」という意味が「念」に認められることなど、思考全般を幅広く表し得る字としては「思」のほうがあったことによるのではなからうか。ただし『万葉集』の「念」には、仏教語の意味は認められない。一方、「強く思う」という意味は、認めてよいかもしれない。このことについては、後述する。

### ③意味・用法の観点から

#### (1) 主語について

ここでは、「念」「思」について、意味・用法の観点から述べたい。「オモフ」は動詞であり、述語になり得ることから、意味・用法を考えるに当たっては、主語や連用修飾語(ここではオモフの対象)について見ていくことが有効であると考ええる。

まず、主語について見ていく。主語が、所謂、一人称(詠み手自身や会話の主)、二人称(和歌を詠む相手や会話

の相手)、三人称(話題の人物)、不定称(特定されない人物)のいずれであるかを、表にまとめると、次のようになる(複合動詞、名詞は用例から除く)。

	一人称	二人称	三人称	不定称	人間ではないもの
思	122	15	10	0	波花草雄雲(各1例)
念	363	20	16	1	
					0

表から、「念」「思」とともに、一人称、二人称、三人称を主語にとることがわかる。それぞれの人称における用例数の比率は、二人称、三人称の占める割合が、「思」のほうが「念」に比べて、やや高くなっている。不定称は用例数が少ないことから、「思」で0例となっているのは、偶然の結果であろう。「念」「思」の大きな違いは、「波」「花」といった、人間でないものを主語にとる例が、「思」のほうに見られるということである。

ここで、なぜ、「思」に、人間でないものを主語にとる例があるのかを考えてみる。このことについて、明確な答えは未だ見いだせないが、「相手が何かを思っているのではないか」と、詠者が類推する場面で「思」がよく使われていることと関わりがあるのではなからうか。このことは、二

人称や三人称を主語にとる割合が、「思」のほうで高くなっていることも関連しよう。「波」や「花」といった人間でないものを主語にとる例は、全て擬人法であり、会話の相手や話題の人物を主語にとる例に準えて考えることができる。一方、「念」は、詠者自身が相手のことを実際に思っている場面が多く使われる傾向にある。詠者が実際に恋い慕う場面には「念」が、また、相手が詠者を恋慕しているのではないかと自らが類推する場面には「思」が選択される傾向がある。一例を挙げると、先の15の歌、「おもはぬを「不念乎」 おもふといはば「思常云者」(561番)において、実際には詠者が相手のことを思っていないことを表す場合には「不念」のように「念」が使われ、「それなのに仮に思うと言えば」のように、仮に作り上げたいわば「嘘のおもい」は「思」が使われていることも、詠者の実際の思いを示した「念」、詠者の類推の思いを示した「思」として捉えることができるのではなからうか。先に、「念」には、自発表現が多いことを述べたが、これも、「念」が詠者自身の実際の思いを表す場面が多く用いられることと関わっているようである。さらに言えば、「念」は、詠者自身の、飾らない、直情的な、実際の思いであるから、自ずと思いの「強さ」「継続性」という意味も加わってくることになり、この

点で中国での「念」の意味と重なる部分があるのではなからうか。人間でないものを主語にとる「思」の例は、第三者の思いを類推する「思」の用法に準えて捉えることができるのではなからうか。

次に、主語の属性について、さらにいくつか確認しておくことにする。まず、複数が単数かという点では、「念」「思」とともに、複数と単数の用例が認められる。単数の例は、「念」「思」とともに多いので、ここでは複数の例のみを挙げておく。

「念」で主語が複数の例（「父と母」が主語である）

28 ちちのみの 父のみこと ははそばの 母のみこと  
おほろかに 心つくして おもふらむ「念良牟」その  
子なれもや ますらをや むなしくあるべき あづさ  
ゆみ すゑ振り起こし なぐや持ち ちひろいわたし  
つるぎたち こしに取りはき あしひきの やつをふ  
み越え さしまくる 心さやらず のちのよの 語り  
つぐべく 名を立つべしも（巻第十九 484 和歌）

「思」で主語が複数の例（「兄ら」が主語である）

29（前略）かへり立ち 道をくれば うちひさす みやを  
みな さすたけの とりねをとこも しのぶらひ か  
へらひ見つつ たが子そとや おもはえてある 如是

所為故為 いにしへ ささきしわれや はしきやし  
けふやもこらに いさにとや おもはえてある「所思  
而在」如是所為故為 古の さかしき人も のちの  
世の かがみにせむと おいひとを送りし車 持ち  
帰りけり 持ち帰りけり（巻第十六 3791 和歌）  
さらに、主語が男性か女性かという観点からいうと、  
「念」「思」どちらも、男性女性ともに主語となり得る。以下、「念」「思」が、男性を主語にした例、女性を主語にした例、それぞれ一例ずつ挙げておく。

○男性を主語にした例（30は「妹によりては」とあることから、主語は男性である。31は、「我は妹おもふ」とあることから、主語は男性である。）

30 岩根踏み 夜道行かじと おもへども「念跡」妹によりては 忍びかねつも（巻第11 2530 和歌）

31 笹の葉は み山もさやに さやげども 我は妹おもふ「吾者妹思」別れきぬれば（巻第2 133 和歌）

○女性を主語にした例（32は、「あひおもはぬ妹」とあることから、主語は女性である。33は、「我が背子にまた逢はじかと」とあることから、主語は女性である。）

32 あひおもはぬ「相不念」いもをやもとな すがの根に

長きはるひを 思ひ暮らさむ (巻第10 1934 和歌)

33 我が背子に または逢はじかと おもへばか「思慕」

けさのわかれの すべなかりつる (巻第4 540 和歌)

次に、主語となる語の身分について見てみると、これも

「念」と「思」に違いはないようである。以下、身分の高い

天皇が主語となる例を、「念」「思」それぞれ一例ずつ挙げ

ておく。一般の民衆を主語にとる例は、「念」「思」ともに

多いので、ここでは用例を挙げるのを省略する。

34 玉だすき 畝傍の山の 榎原の ひじりの御代ゆ 生

れましし 神のことごと つがの木の いやつぎつぎ

に 天の下 知らしめししを 天にみつ 大和を置き

て あをによし 奈良山を越え いかさまに おもほ

しめせか「御念食可 或本云 所念計米可」 あまざか

る 鄙にはあれど いははしる 近江の国の 楽波の

大津の宮に 天の下 知らしめしけむ (巻第1 29

和歌)

35 すめらぎの 神の命を しきいます 国のことごと

湯はしも さにはあれども 鳥山の よろしき国と

ごごしかも 伊豫の高嶺の いさ庭の 岡に立たして

歌おもひ「歌思」 辞おもほしし み湯の上の 木群を

見れば 臣の木も 生ひ継ぎにけり 鳴く鳥の 声も

変はらず 遠き代に 神さび行かむ 行幸どころ (巻

第3 322 和歌)

以上、主語の観点から捉えた場合、「念」「思」の違いと

しては、人称による使用数に異なる点が見られたのみで

あった。

(2) 思考の内容について

「念」「思」の用例数が多いので、一例ずつ細かく検討す

るには紙面の都合上難しいが、ここで「念」「思」の思考の

内容を大まかにまとめておきたい。

思考内容を、「念」「思」それぞれ用例数とともに示すと、

次のようになる (なお、主語や対象が不分明な「念」「思」

の用例は、この中に含まれていない)。

(ヲ格が想定される自分・相手・事物等に対して)

(人物)

○自分のことに関する内容

「自分のことを」と思う」

自分のことを ますらをとと思う

自分のことを 命長かれと願う

自分のことを 消え入るばかりに思われる

自分のことを 天皇の栄えるときに生まれたと

念 思

5 1

5 0

4 0

思う

自分のことを 深く思っている

自分のことを あなたまかせと思っていた

自分のことを 名が惜しい

自分のことを 眉がむずむずとして恋人に会う

予感がする

自分のことを 死ぬことをなんとも思わない

自分のことを いつまでも生きようと思う

自分のことを 死のうと思う

自分のことを 逃げ出そうと思う

「自分の行動に関することを」と思う」

自分の行くべき道を いいかげんに思う

無遠慮に訪問したことが 楽しく思われる

遠い昔にあった出来事を

ほんの昨日のように思える

旅することを 悪くないと考えている

妻に死なれて帰る家路を 悲しいと思う

「自分の恋心に関することを」と思う」

恋する気持ちを 外に出すまいと思う

恋で泣いたことを 思い出す

恋する気持ちを 苦しいと思う

○相手のことに関する内容（或いは、「相手が私のことを思う」）

「相手のことを」と思う」

相手を いつまでも生きているように感じる

相手を 親しく感じる

相手を 死ねと思う

相手を 末永く仕えようと思っていた

相手を いつまでも長く生きているように願う

恋人を紹介してくれた人を 恨めしく思う

死んだ人を 思い出す

死んだ人を 悲しく思う

異性を 恋しく思う

異性を 懐かしく思われる

異性を 会おうと決める

異性を 手に入れたい

異性を 忘れられない

異性を 絶えると思う

異性を 会えることを期待する

異性を 会えないと思う

異性を 会っていることの喜びを感じる

0	1	1	0	0	1	1	1	1	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0
1	0	1	1	1	0	0	0	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0

1	1	1	3	3	3	4	11	233	2	5	1	0	1	1	4	6	0	0	0
0	1	0	0	0	0	2	0	45	0	0	0	2	0	0	2	0			



異性を	夢に見ようと思う	1	0	同性を	思い出される	1	0
異性を	衣を摺ろうと思う	1	0	同性を	お慕いする	0	1
異性を	衣に染め付け持っていきたい	1	0	妻子を	深く愛する	1	0
異性を	逢ってから千年も経ったと思う	1	0	子供を	深く愛する	1	1
異性を	これほど恋しくなるとは			母を	深く愛する	1	0
	予想しなかった	1	0	後継者を	心配する	1	0
異性を	忘れたと心配する	1	0	死んだ人を	思い出す	0	0
異性を	無事であってくれと願う	1	0	幼なじみを	会えるとは予想しなかった	0	1
異性を	いつもこうだと思う	1	0	相手が私を	思い止めて	2	0
異性を	あなたのような人が他にも			相手が私を	恋しく思う	0	0
	いると思う	1	0	相手が私を	好ましいと思う	0	1
異性を	来なくなったと思う	1	0	相手が私を	恨む	0	1
異性を	見捨てたと思う	1	0	相手が私を	自分の所へ戻ってこないと思う	0	1
異性を	途絶えようと思う	1	1	相手が私を	風流だと思う	0	1
異性を	いい加減に思う	1	0	相手が私を	どこかの御曹司と想像する	0	1
異性を	恋悩む	0	1	相手が私を	昔華やかだったことが本当かと疑う	0	1
異性を	仲が永遠だと思っていた	0	1	家族の者が私を	心配に思う	0	1
異性を	尊敬し仰ぐ	0	1	[相手の行動に関すること]			
異性を	心配する	0	1	〈都について〉			
異性を	見えないことから想像する	0	1	都を移すことを	悲しく感じる	1	0
異性の眉の様を	思い浮かべる	0	1	里を	ないことが不思議だと思う	1	0

〈建物について〉

家を なつかしく思い出す

御殿を 永久だと思う

宮殿を 永久に栄えるようにと願う

宮処を 慕う

我が家を 旅寝のように落ち着かない

〈土地について〉

土地を 思い出す

土地を 執着する

土地を ことと同じだと思う

土地を 見たい

土地を 住み易いと思う

土地を 見ることを諦めていた

土地を 通り過ぎにくいと考える

妻が亡くなったところを 形見として思う

夜道を 行くまいと思う

〈自然現象について〉

つむじ風を 一面に吹き卷くかと思う

〈自然物について〉

鳥を

鶏頭を

いつくしむ

蒔こうと思う

4 0

3 0

0 2

0 1

0 1

0 1

19 8

4 1

2 0

2 0

1 0

1 0

0 1

1 0

1 0

1 0

1 0

1 0

1 0

1 0

1 0

月を 見えなくなるのが惜しい

月を 見えなくなるのを悲しむ

花を 散ってくるのかと思った

相手の家の花を 懐かしく思う

梅の花を 家の柳の葉が想像される

山吹の花を 長い間待たれる

植物を 心引かれる

藤を 美しいと思う

露を 心引かれる

ほととぎすを 鳴き声を聞くことがうれしく

紅葉を 感じられる

山を 思い出す

風景を 形見と思う

愛する

〈生きている世界について〉

この世のことを 心残りに思う

家などのことを 辛いと思う

〈時について〉

昔を 偲ぶ

季節を 春と思う

季節の変わり目を わかる

1 0

1 0

1 0

1 0

1 0

1 0

1 0

1 0

1 0

1 0

1 0

0 1

0 1

0 1

0 1

0 1

0 1

0 1

8 2

1 0

1 0

年月を 何年も経ったように

感じられる

遠い先のことを 予想する

《言について》

言葉を 世の常の人のものと思う

昔の伝説を 偲ぶ

歌を 考え出す

言葉を 練る

《事物について》

笠を 私が着ようと思つてゐる

小櫛を 手に取ろうと

枕を 私だと思ふ

君が持っていた投げ矢を 思い出される

《解説不能のもの》

雨夜の葉非左を 思われる

《二格が想定される相手や事物に対して》

(私が) 異性に 花を見せようと思ふ

(波が) 浜に 寄せようと思ふ

(草が) 私に 同情する

《慣用的表現》

「思いがけず」の意

(ヲ格・二格ともに想定されないもの)

自分が 漕ごうと思ふ

自分が 漕ぎ渡ろうと思ふ

自分が 母にしかられて物思ひをする

花が 咲こうと思つて

私が 結んでおいた紐が切れたことから

考えると

私が 眉を描くことから変だと類推していた

私が 異性が逢つてくれないことから

類推すると

私が 眉がかゆいと感じる

私が これこそ旅だと感じる

私が 一人で寝た夜を数えようと思ふけれど

私が 妻と遠く離れて心穏やかでない

私が 歩いていく夫の姿を思うと心が痛む

私が 節句のためにと思つて(桜を植えた)

さて、以上、「念」「思」について、思考の内容から分類

した。これをみて、気づくことは、まず、「異性のことを恋

しく思う」「土地を思い出す」等、「念」「思」両方の字が使

われている思考内容が多く認められるということである。

このことは、『万葉集』において、「念」「思」が、何らかの基準で使い分けられていたとしても、その基準はゆるやかなものであったことを伺わせる。ただ、それほど、使い分けが明確でないにしても、何らかの使用上の基準があったのではないかということも、また、先の分類結果は示している。

1 「決意」「考察」「予測」「案出」という意味を含む思考内容では、「思」が多く使われる。

決意 「いつまでも生きようと思う」「死のうと思う」「逃げ出そうと思う」など

考察 「旅することは悪くないと考えている」「その土地は通り過ぎにくいと考える」など

予測 「遠い先のことを予測する」「幼なじみに会えることを予測する」など

案出 「歌を考え出す」「言葉を練る」など

2 相手が自分をどのように思っているかを想像する場合  
は、「思」が多く使われる。

「相手が私を恋しく思う」「相手が私を好ましいと思う」「相手が私を恨む」「相手が私を自分の所へ戻ってこないと思う」「相手が私を風流だと思う」「相手が私をどこかの御曹司だと想像する」「相手が私に対して、昔華やか

だったことが本当かと疑う」「家族の者が私を思う」など  
3 ヲ格やニ格が想定されない例を含め、相手とは無関係な思考内容の場合には、ほとんど「思」が使われる。

「漕ごうと思う」（決意）、「漕ぎ渡ろうと思う」（決意）、「（花が）咲こうと思う」（決意）、「一人で寝た夜を数えようと思う」（決意）、「結んでおいた紐が切れたことから考える」（考察）、「これこそ旅だと思う」（考察）、「節句のためにと思う」（考察）、「眉を描くことから変だと類推していた」（類推）、「異性が逢ってくれないことから類推する」（類推）など

このように、「思」は、詠者の判断を伴うような思考内容を示す場合が多い。思考内容が論理的な方向に傾く場合には、「思」が選ばれる傾向にある。これに対して、思考内容が感情的な方向に傾く場合には「念」が選ばれる傾向にある。この感情的な思考内容のうち、代表的なものが「異性に対する恋愛的感情思考」であり、これが、「念」に、最も多く認められる思考内容となっている。この、感情的な思考内容は、異性の他にも、何らかの具体的な対象に向けられることが多い。「念」が常にニ格、ヲ格が想定できる構文で使われるのは、このことと関わりがあらう。

先に述べたように、「念」「思」には、思考内容が重なる

場合も多い。この重なる思考内容をみてみると、「恋しく感じる」「願う」「思い出す」といった内容が挙げられる。これらの内容に、「念」「思」が両方使われているのは、これらの内容が論理的な側面と感情的な側面を併せ持っているからだと考えられる。

(3) 思考の継続性の有無について

最後に、思考の継続性の有無が、「念」「思」の選択の問題とどのように関わっているかということについて考える。中国の『説文解字』では、「念」は「常思也」とされ、継続性のある思考として捉えている。上代成立の『古事記』や『日本書紀』でも、「念」に思考の継続性が認められた。『万葉集』の「念」にも、思考の継続性の意味が認められるであろうか。

さて、『万葉集』の「念」のなかから、継続性が認められるものの例をいくつか挙げておく。

① 助詞の「つつ」によって継続の意味を添えるもの

36 あまざかる 鄙の荒野に 君を置きて おもひつつあれば「念乍有者」 いけるともなし（巻第二 227 和歌）

② 継続性を表す修飾語が付されるもの

37 一日には 千重波敷きに おもへども「雖念」 なぞそ

の玉の 手に巻きたき（巻第三 409 和歌）

38 わがせこが いきのまにまに おはむとは 千度おもへど「千遍雖念」 たわやめの あが身にしあれば みちもろの とはむ答へを 言ひやらむ すべを知らにと（巻第四 543 和歌）

39 夢のうみに つぎて見えつつ 竹島の 磯こす波の しくしくおもほゆ「敷布所念」（巻第七 1236 和歌）

40 秋津野に 朝居る雲の 失せ行けば 昨日も今日も なき人おもほゆ「無人所念」（巻第七 1406 和歌）

41 玉だすき かけぬ時なく 息の緒に 我がおもふ君は「吾念公者」 うつせみの 世の人なれば（巻第八 1453 和歌）

42 雲隠り 鳴くなる雁の 行くて居む 秋田の穂立 繁くしおもほゆ「繁之所念」（巻第八 1567 和歌）

43 今のごと 心を常に おもへらば「念有者」 まづ咲く 花の 地に落ちめやも（巻第八 1653 和歌）

44 秋されば かり飛び越ゆる たつたやま 立ちてもゐても 君をしそおもふ「君乎思曾念」（巻第一〇 2294 和歌）

45 をとめらを そでふるやまの みづかきの 久しき時ゆ おもひけりあれば「念来吾等者」（巻第十一 2415 和歌）

和歌

46 おも忘れ かななる人の するものそ われはしかね  
つ つぎてしおもへば「継手志念者」(巻第十一) 2533

和歌

47 風をいたみ いたぶる波の あひだなく あがおもふ  
君は「吾念君者」 あひおもふらむか(巻第十一) 2736

和歌

48 わぎもこそ 聞きつがのへの しなひねふ あは忍び  
得ず まなくしおもへば「間無念者」(巻第十一) 2752

和歌

49 あが恋は 昼夜わかず ももへなす 心しおもへば  
「情之念者」 いたもすべなし(巻第十二) 2902 和歌

50 あがおもふ 心知らずや行く影の 月もへゆけば 玉  
かぎる 日もかさなりて おもへかも「念戸鴨」(巻第

十三 和歌)

③ 継続性を示す述語の存するもの

51 たまほこの 道に出で立ち 別れこし 日よりおもふ  
に「日従于念」 忘る時なし(巻第十二) 3139 和歌

52 とまりにし 人をおもふに「人乎念尔」 あきづのに  
ある白雲の やむ時もなし(巻第十二) 3179 和歌

④ 「オモフ」を重ねることによって継続性を表すもの

53 夢のわだ ことにしありけり 現にも 見てけるもの  
を おもひしおもへば「念四念者」(巻第七) 1132 和歌

このように、「万葉集」で、「念」は、継続性を示す様々な表現とともに使用されている。これらの例をみると、

「念」に継続性の意味を認めてよさそうであるが、なお問題点も存する。その一は、継続性を示す表現とともに使用されていらない、この他の多くの「念」の例をどのように扱うかということである。具体的な表現がない以上、客観的に

継続性の有無について判断することが難しい。その二は、「思」の用例の中にも、継続性を示す表現とともに使用されたものも存するということである。「念」「思」両方の例を照らし合わせると、継続性の意味が「念」だけの特徴ではなくなる。

以下、「思」に思考の継続性の意味が認められるものを挙げる。

① 助詞の「つつ」によって継続の意味を添えるもの

54 おもひつつ「思乍」 くれどきかねて 三尾の崎 真長  
の浦を またかへりみつ(巻第九) 1733 和歌

② 継続性を表す修飾語が付されるもの

55 真野の浦の 淀の継ぎ橋 心ゆも おもへや妹が「思

哉妹之」 夢にしみゆる (巻第四 490 和歌)

56 千鳥鳴く み吉野川の 川の音の 止む時なしに お

もほゆる君「所思公」(巻第六 915 和歌)

57 やちほこの 神のみより ともし妻 人知りにけり

つぎてしおもへは「告思者」(巻第一〇 2002)

58 月重ね わがおもふ妹に「吾思妹」逢へる夜は 今し

七夜を 継ぎこせぬかも (巻第一〇 2057)

59 ぬばたまの くるかみやまの やますげに こさめ降

りしき しくしくおもほゆ「益々所思」(巻第十一 2456

和歌)

60 心には ちへにももへに おもへれど「思有杼」 人目

を多み 妹にあはぬかも (巻第十二 2910 和歌)

61 さだのうらに 寄する白波 あひだなく おもふをな

にか「思乎如何」妹にあひかたき (巻第十二 3029 和

歌)

以上、中国の『説文解字』に記されたような思考の継続性が、『万葉集』の「念」の意味として認められるかどうかを確認してきた。「念」は、思考の継続を意味する表現と共に使われていることが多い。しかし、「念」に思考の継続性という意味があり、「思」にはそれがないと断定するには、先に述べたように問題点も存する。拙稿の筆者としては、

現段階では、判断しかねている。ただ、上代成立の『古事記』や『日本書紀』に比べて、『万葉集』では、「念」「思」の使い方に曖昧な点が多いように思われる。

## ま と め

これまで、『万葉集』における「念」「思」の使い方について、文法的側面や意味用法の側面から考察してきた。その結果、両字の使い分けに明確な基準は見いだせなかったが、概ね、「念」は感情的な思考活動に対して使用され、「思」は論理的な思考活動に対して使用される傾向が認められた。題詞・左注で「オモフ」という和語動詞を表記する場合や、複合動詞を表記する場合は、「思」が使用されるといった特徴も認められた。

ただし、両字には、使われ方が曖昧な例も多く存する。一首の和歌の中に、「念」と「思」の両方の字が使われている、「オモフドチ」といったような同じ表現であるにもかかわらず「念」も「思」も使われていたりしていた。また、異本間で「念」「思」の表記が異なっている例もあった。

しかしながら、このような例は、「念」が表す意味と「思」が表す意味との重なり合いの中から生じたもので、先に挙げたような例があるからといって、『万葉集』の「念」

と「思」に、使い分けの基準が全くなかったということにはならない。思考活動は、論理的な側面と感情的な側面とがあり、両者は連続しており、どちらの側面も有する思考活動の場合には「念」と「思」の選択は難しい面が存したのではないだろうか。

『万葉集』の「念」「思」の使い方を、『古事記』や『日本書紀』の「念」「思」と使い方と照らし合わせてみると、「念」が感情的な思考活動を表すことや、「念」に思考の継続性が認められる例が多いことなど、概ね同じような使い方がされているようである。ただし、『万葉集』では、題詞と和歌で「念」「思」と使い方に異なった傾向を見せること、「念」「思」の選択のされ方にゆるやかなところが存することなど、記紀とは違った状況も認められる。

この違いは、どこから来るのか。記紀も『万葉集』も、上代に成立した作品ではあるが、前者は記録体であり、後者は和歌であって、文体が異なっている。内容も、国の歴史を書いた記紀と思いの丈を和歌に託した『万葉集』では、違いが存する。これら諸要素の違いが、「念」「思」の使い方の違いとなって現れたのだろうか。文体と漢字の用法との関わりという側面から、考えなければならぬ問題として、今後の課題としたい。

(注)

- (1) テキストは、『万葉集(一)』(4)『日本古典文学全集(2)』(5)校注・訳者 小島憲之 木下正俊 佐竹昭広 株式会社小学館 昭和六十一年十月十日発行)を使用した。
- (2) 用例は、拙稿の筆者が、テキストを通読するという形で採取した。通読は三回行ったが、なお漏れた用例が存することを恐れる。
- (3) 『校本万葉集』(佐佐木信綱ら編 増訂普及版 岩波書店)で確認したところ、「思」の一部を除き、「念」「思」ともに「オモフ」と読まれていた。「思」には、一部「シノフ」と読まれたものが存したが、それらの例は、本稿での考察の対象から外した。「思」を「シノフ」と読んだ例は、諸本を通じて同じように「シノフ」と読まれていた。また、諸本間で、「思」と「念」が交替している例は認められなかった。これは、後世になっても、「思」と「念」の使い方を曖昧にせず、本文をしつかりと受け継いでいることを示している。
- (4) 『黒川本色葉字類抄』(巻中 65丁表8行目 人事)に、「オモフ」と読む漢字として、「念」「思」ともに掲載されている。また、『観智院本類聚名義抄』では、「念」(僧中4)にも「思」(法中71)にも「オモフ」の訓が掲載されている。
- (5) 拙稿「和化漢文における『念』『思』の用字法」『広島女学院大学 国語国文学誌』第26号 平成8年
- (6) 『万葉集における正訓文字の訓法——念・思について——』(鶴久『福田良輔教授退官記念論文集』昭和44年10月30日)



(7) 同じ和歌中で、「オモフ」が複数使われる場合、同じ漢字を使っている例としては、次のような例がある。ここでは、それぞれ二箇所「オモフ」が使われているが、全て「念」で表記されている。

風をいたみ いたぶる波の あひだなく あがおもふ君  
は「吾念君者」 あひおもふらむか おもへども「念友」  
おもひもかねつ「念毛金津」 あしひきの やまごりの尾の  
長きこのよを (巻第十一 2802 和歌)

(8) 本邦で「オモフ」を表す「念」に仏教語的な意味は認められないが、「ネンズ」とサ変動詞で読むことが可能な場合には、仏教語的な意味を帯びる。拙稿「平安・鎌倉時代に於ける『念ス』の意味・用法——『オモフ』と比較して——」(『国文学攷』第一二九号 平成三年三月)、拙稿(注5)を参照いただきたい。